

タイトル:平成 28(2016)年度 教育セミナー(第 12 回)

日時:2016 年 9 月 18 日(日)~21 日(水)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

「ロマンティック・コメディによる脱構築 : パレスチナ系アメリカ人監督映画

『結婚後の平和』におけるジェンダー表象のポリティクス」

佐藤 愛 (京都大学大学院人間・環境学研究科)

中東☆イスラーム教育セミナーへの参加は今年度で2回目になります。昨年のセミナー終了時に、公式な感想として言ったのか、打ち上げ中の会話だったのか定かではないのですが、とにかく「来年は私も発表したい！」と言明した記憶があります。今年度は幸いにも発表者としてセミナーに参加でき、1年越しの希望が叶いました。今回の感想はその発表の経験を中心に綴ろうと思います。

私はセミ・クローズドの研究会での発表を何度か経験しており、それなりの人数を前にした発表にはまあまあ慣れているつもりでした。しかし2日間に渡って他の受講生の方々の発表を聞いたのちにいざ自分が、となると意外なほどに緊張してしまい、前夜は碌に眠れず、発表時も緊張で手が震えていました。ですが予想以上にたくさんのコメントや質問をお寄せいただき、ひとつ報われた気持ちになりました。いただいたコメントの中には当然ながら痛いところを突いてくるものも多数あったのですが、フロアの先生方・受講生の方々がひとりひとりの発表者に対してとても親身になってくださる空気の中で、厳しいコメントもきわめてポジティブに受け止めることができました。今現在取り組んでいる修士論文の構成は発表時と比べてかなり変わってきているのですが、これはいただいたご指摘・ご助言に依るところの大きい「改善」だと思っています。

実際にやってみて確信したことですが、中東☆イスラーム教育セミナーでの発表はやはり特別です。そもそもひとつの発表に1時間以上(発表 40 分+質疑 30 分)割いてもらえる機会はそうありません。とりわけ、自大学のゼミでの発表時間が人数などの関係で短いような方々にとっては、自分の研究内容を細かいところまで開示できる貴重なチャンスではないかと思います。また、同じぐらい長い時間を割いてもらったゼミや研究会での発表経験と比べて感じるのは、ディシプリンも対象地域も時代も様々な人々の前で行う教育セミナーでの発表というのは、ゼミ発表とは全く違った方向において勉強になる経験だということです。異なる研究関心やディシプリンを背景にもつ方々から思いもしない角度の質問を投げかけられるというのは、ある程度研究関心や方法論が共通していることが暗黙の前提になる仲間の前での発表からはなかなか得られない経験です。自分の研究における根本的な説明不足や穴に気づき、研究関心をより謙虚に見直して深めるきっかけとなります。さらには夏休み中の研究のペースメーカーになる、同じ山を越えた他の受講生の方々との連帯感が大いに強まるなど、良いこと尽くめの機会がセミナー発表です。来年度以降このセミナーに参加される方々には、ぜひ臆さずに発表者に立候補してほしいと思います。

最後になりましたが、このような素晴らしい機会を与えてくださった先生方、ならびに千葉さんに心からの感謝を申し上げます。今年も本当にありがとうございました。